



青少年赤十字 リーダーシップ・トレーニング・センター ガイドブック

指導者

目 次

03	1 トレーニング・センターの目的と教育的意義
	目的
	トレーニング・センターの教育的意義
05	2 トレーニング・センターの計画と準備
	開催計画の策定
	参加者の募集と決定
	会場の設営
	その他の準備事項
07	3 トレーニング・センターの企画と運営
	課題の設定
	基本日程
	指導体制
	プログラムの展開
13	4 学習活動について
	学習計画の策定
	学習活動展開上の指導留意点
18	5 トレーニング・センターの生活運営と指導
	トレーニング・センターの「生活」
	トレーニング・センターの一日の流れ(例)
	生活組織と運営
	健康管理と安全対策
25	6 トレーニング・センターのまとめと活用
	トレーニング・センターのまとめ
	学校活動への活用
26	資料編
	・ 旗の掲揚のしかた
	・ ワークショップ(W・S)
	・ グループワーク(G・W)
	・ フィールドワーク(F・W)
	・ フィールドワーク設定例
	・ 空は世界へ
	・ 青少年赤十字の歌

目 的

トレーニング・センターは、青少年赤十字の教育プログラムのひとつで、青少年赤十字の組織と活動の中核となる「児童・生徒のリーダー」の養成を目的としています。しかし、ここで言う「リーダー」とは、ある特定のメンバーだけがリーダーシップを取るのではなく、グループのメンバー全員が進んでグループの中で役割を持ち、仕事の内容や時と場所によって、ある時はリーダーになり、またある時は協力者の立場をとることができるように、メンバー全てが「リーダーシップの取り方を学ぶこと」を目指しています。

また、このトレーニング・センターでは、赤十字の基本原則や国際人道法などを学ぶことによって、青少年赤十字の願いである人道的な価値観を自ら身につけ、行動することのできる青少年の育成も目指しています。

トレーニング・センターの教育的意義

トレーニング・センターは、集団生活を通して行われる学習活動の場です。特に、参加者がリーダーとして必要な自主・自律の精神を身につけ、赤十字や青少年赤十字に関する知識や技術を集中的に学習することにより、生活態度全般にわたる人間形成をする場となっています。こうした視点から、指導者の教育的配慮による指導と様々なプログラムが組みられます。

1) 赤十字を集中的に学ぶ場

トレーニング・センターは、赤十字とその精神について集中的に学習する機会です。普段の学校生活や活動では機会の少ない、赤十字についてのより深い理解と共感を養う場です。

2) 24時間教育の場

トレーニング・センターは、24時間教育の場です。それはゆとりのない詰め込み教育の場という意味ではなく、定められた学習時間だけでなく、期間中の生活の全てを自ら進んで学ぶ機会として主体的に生かして欲しいという意味です。あらゆる場面で自分の能力を試し、生かし、伸ばすための挑戦の場でもあります。

3) 異質なもののとの出会いの場

トレーニング・センターの集団生活は、異質なもののとの出会いの場です。異なる生活背景や体験をもった一人ひとりの個人が集まり、一つの目的のもとに共同生活をする中で普段の生活にはない新しい体験が生まれ、友達の輪を広げることもできます。集団生活の中で生きる一員としての自覚や受容と寛容の精神を学ぶ場でもあります。

4) 自主・自律の心を育てる場

トレーニング・センターは、児童生徒の自主・自律の態度を養うための配慮をもって運営されます。その具体的な方法が、彼等自身の気づきと行動を引き出すための「待ちの姿勢」といわれる指導者の配慮です。「指示して実行させる」ではありませんので、「投げかけ」とある程度の時間が必要になります。

5) 自分と向き合う場

トレーニング・センターは、自分と向き合う場でもあります。参加者の多くが、「自分とこれほど向き合った経験がなかった」と感想を漏らすのはそのためです。

ワークショップや先見の時間など、様々なプログラムで自分を深く見つめ直し、自分の理想や希望を確かめ、実現の方向づけを試みる機会でもあります。集団生活の中でも一人ひとりの個人を大切にし、その成長を期するのがトレーニング・センターです。

2 トレーニング・センターの計画と準備

開催計画の策定

トレーニング・センターは、実施する目的（具体的な実施意図）や参加対象によって、その開催形態が異なってきます。

支部または地区が、各加盟学校の児童生徒代表を対象として実施する場合、あるいは学校が独自で行う場合なども考えられます。このように形態が異なることにより、開催計画の内容も種々異なってくるのは当然ですが、いずれの場合でも時期、会場、対象（人員）、日程などの要項は早期に策定し、十分時間的な余裕をもって準備が行えるようにします。

参加者の募集と決定

(1) 参加者一人ひとりがトレーニング・センターに参加する目的意識をはっきりと持っていることが望ましく、そのためには、参加者の募集にあたって、学校等に対する開催計画の周知や参加者の資格条件の明示などが大切です。

(2) 参加者が決定したら、十分な事前準備ができるように必要事項について連絡の徹底を図ります。

具体的には、実施要項や会場案内、携行品などの「参加注意」のほか、学校での青少年赤十字活動のまとめや課題作文の作成など「事前学習」の指導を行います。

この事前学習は、トレーニング・センターに対する参加者の興味と関心を高め、参加の“心がまえ”を養うとともに、赤十字や青少年赤十字に関する基礎的な理解を得させることが期待できます。

会場の設営

(1) トレーニング・センターの会場としては、学校や青年の家などの青少年宿泊研修施設、旅館などが考えられます。

これらの借り上げ施設が、トレーニング・センター会場として十分に機能するように設営します。

特に、宿泊、食事、浴室など生活上の設備、機能のほか、学習活動のためのスペースや設備についても、全体研修のスペース、小集団活動のための部屋や、掲示板、事務作業コーナー、資料展示コーナーなどが設営できる共用のスペースが必要となります。

(2) 青年の家など青少年宿泊研修施設などを利用する場合、他団体との使用の重複や合同行事（朝夕のつどいなど）への参加など、日程進行に影響が生じる場合があるので、会場使用上の事前打合せが重要です。

- (3) 施設内外にわたる安全の確認を行います。
特に、集団行動を予測した避難設備(経路・集合地点など)の点検は、事前に必ず行い、洗面、トイレ、浴室などの衛生設備についても、参加者の健康管理の面から点検をします。
- (4) トレーニング・センター参加者の意識が集中し、望ましい雰囲気のなかで生活が進行していくためには、施設周辺の環境の及ぼす影響が大きいため、環境チェックを行います。

会場設営の工夫

トレーニング・センターの諸活動が、参加者の自主的、自律的な行動によって展開されるため、これらの発意と実践を促すように、会場設営上いくつかの工夫が考えられます。

掲示板

トレーニング・センターの生活は、合図のない生活です。号令をかけたり、かけられたりしない「自分が自分の主人公である」生活をおくります。このため「本部から参加者へ」、「参加者から参加者へ」のような形で、連絡、よびかけ、案内など一切の周知事項をこの掲示板で行います。

事務作業コーナー

参加者が、各自で持参する筆記用具とは別に、本部が用意する事務用品コーナーと工作台を設け、参加者が自由に使えるようにします。

資料展示コーナー

活動記録、参考図書、海外から届いたトピックアルバム・ポスターなどを展示し、学習活動の参考資料として活用します。

また、資料の「自由におとり下さい」のコーナー設置や、学習活動の進行にしたがって作品などの展示もできます。

その他の準備事項

- (1) 教具、事務用品、配付資料などの準備。
- (2) 教育委員会や会場所在地の警察署、消防署など関係機関への連絡、依頼など。

課題の設定

トレーニング・センターを企画するにあたって、実施する“ねらい”（意図）を明確に把握しておくことが大切です。

つまり、現在、支部や地区、学校の青少年赤十字活動がおかれている状況をつかみ、また国内や世界の動きにも関心を払い、必要な分析を行い、当面している課題がなんであるかを明らかにして、トレーニング・センターの企画に盛りこむことです。これによって、指導上の日程、展開、内容、会場設営などが具体的に決められます。

基本日程

日程は、生活運営上必要な時間をまず設定し、それ以外の時間のなかで、学習活動をはじめ具体的なプログラムの展開を考えます。

基本日程(例)

	初 日	中 間 日	最 終 日
6:00			
7:00		起床・洗面 身仕度・移動 朝のつどい	
8:00		朝食・自由	
9:00			
10:00			
11:00			
12:00	受付開始 (昼食)		閉会式
13:00		昼食	
14:00	開会式 (身仕度・移動)	ボランティア・サービス・ タイム	
15:00	オリエンテーション		
16:00			
17:00	ホームルーム	ホームルーム	
18:00	夕食・自由	夕食・自由	
19:00			
20:00			
21:00	(ホームルーム連絡会議) 入浴・就寝準備	(ホームルーム連絡会議) 入浴・就寝準備	
22:00	消灯	消灯	

の時間帯が学習活動をはじめ、プログラムの展開部分

指導体制

(1) 指導スタッフ

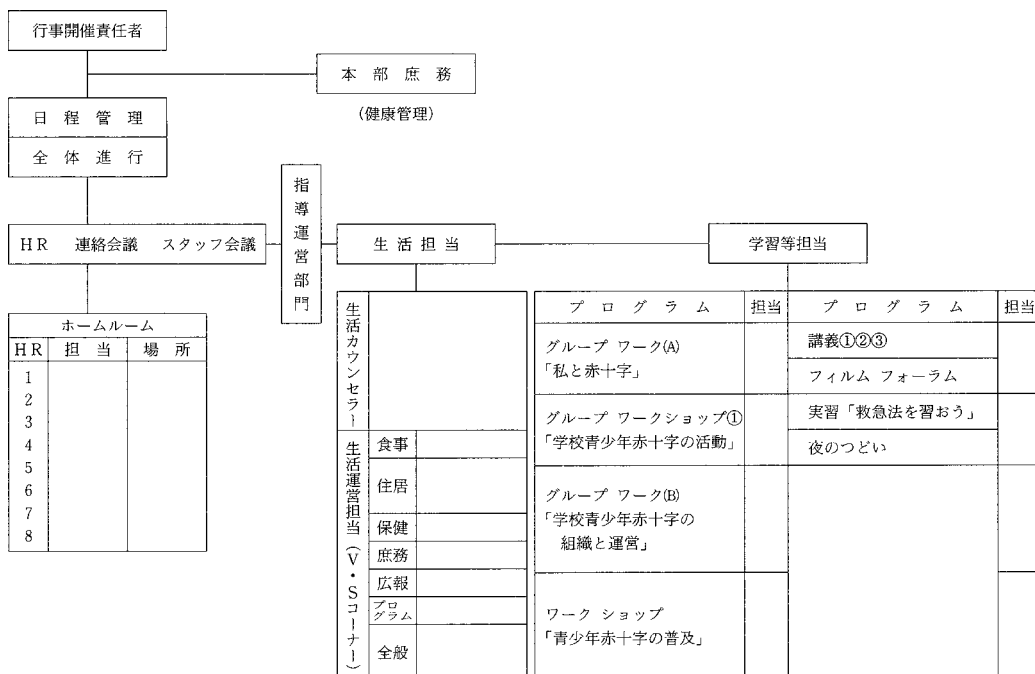
青少年赤十字加盟学校指導者で、本社、ブロックなどの指導者養成講習会を修了し、青少年赤十字の実践活動や集団指導の体験が豊富な先生をスタッフとして委嘱し、本部を編成します。

(2) 指導運營組織

指導スタッフが決定したら、スタッフ会議を開催します。打ち合わせは、開催計画の企画の段階からはじめ、会議は必要により数次にわたる場合もあります。

この後、トレーニング・センターに臨むホームルーム編成、生活運営分担、学習活動指導分担などの指導運営組織を編成します。

※ 次表は、本社主催スタディー・センターの指導運営組織例です。



(3) スタッフ・ガイド

指導運営組織が活発に機能し、適確な指導と円滑な運営が図られるためには、指導スタッフ間のチームワーク（責任分担と相互協力）と、指導方針や展開計画などに対する十分な共通意識をもつことが大切です。

そのために、スタッフ会議などで研究協議して積みあげられてきた指導計画に基づく「スタッフ・ガイド」を作成し、スタッフ間に周知します。

スタッフ・ガイドに盛りこむ内容

- | | |
|-----------|-------------|
| ① 開催の目的 | ⑤ 会場図 |
| ② 指導の基本方針 | ⑥ 生活運営の展開計画 |
| ③ 基本日程 | ⑦ 学習活動の展開計画 |
| ④ 指導運営組織 | ⑧ 日程展開計画 |

日程展開計画の一例

日 時	日 程	展 開 内 容	担 当	場 所	留 意 点
20:30	ホームルーム 連絡会議 ※ホームルー ム連絡員以 外のもの は、各部屋 へ移動 入浴 就寝準備	○日直の選出 ○各ホームルームか らの発表 （反省、提案、連絡） ○発表事項の調整 ○連絡・指導 （本部から）		中会議室	○初日であるので、連絡 会議の役割、議事進行 などについて説明する。 ○各ホームルームからの 発表要領について指導する。 ・ホームルーム内の問題は 持ち出さない。 ・全体にはかる問題を 整理する。 ・すでに発表された事柄は、 発表から除く。
21:00	本部スタッフ 会議	○反省と検討 ○明日の日程の確認 ○連絡事項		中会議室	
22:00	消灯				

プログラムの展開

(1) 指導の基本方針

- ① 青少年赤十字のリーダーとして必要な「赤十字と国際人道法(ジュネーブ諸条約)」と「青少年赤十字」に関する具体的な学習を進めます。
また、参加者一人ひとりが、赤十字活動に参加する意義を理解し、自らの生活行動において実践を行えるよう方向づけをします。
- ② 参加者の自主的、自発的な行動によって、全ての日程を進行します。
また、集団生活の体験を通して、自らすすんで行動する態度を育てる機会として指導します。
- ③ 参加者が、互いに信頼しあい、助けあい、明るく、たのしい生活がおくれるよう工夫し、指導します。
- ④ 参加者の健康と安全に十分留意します。

(2) 生活行動の約束

- ① 合図のない生活(5分前行動)
(誰も号令をかけない、かけられない。)
- ② 注意深い生活
(時計や掲示板を見る習慣をつける。)
(人の話をよく聞く。わからないことは聞く。)
(健康や安全に気を配る。)
- ③ 自分の考えを持ち、表現できる生活
それを行動に表す生活
(短時間でも考える時間をつくることができる習慣を身につける。)
(言葉や行動で表す。)
- ④ 他の人のために自分を生かす生活
(ボランタリー・サービスの実践)

(3) プログラムの組み立て

プログラムは、開会から閉会まで、一つの流れとしてとらえることができます。
各プログラムを、前述の基本日程(P7参照)のなかに、次の点を考慮しながら組みこみます。

- ① それぞれのプログラムに、どのくらいの時間をかけるのか、配分を考えます。
- ② 内容(主題)の面から、プログラムの展開順序を考えます。
例えば、「赤十字の誕生」について学習する前に、「青少年赤十字の歴史」を学ぶようなプログラムの組み立ては避けるようにします。

③ トレーニング・センターにおけるプログラムの分類(例示)

学習活動係	赤十字関係 青少年赤十字関係	○赤十字について(歴史、組織、事業など) ○国際人道法(ジュネーブ諸条約)と赤十字の原則 (学習活動の展開の項参照) ○青少年赤十字について(歴史、活動) ○学校における青少年赤十字の活動、組織、運営、普及 (情報交換、課題討議など)
	リーダーシップ	○グループワーク学習、リーダー学習 ○ボランティア・サービスの実践
	技術	○救急法、水上安全法、健康生活支援講習 ○キャンピング(ロープワーク) ○クラフト、アルバム作成
	レクリエーション 野外活動	フィールドワーク、キャンプファイヤー、キャンドルサービス フォークダンス、レクリエーションゲーム、歌唱指導
生活運営		朝・夕のつどい、ホームルーム、ホームルーム連絡会議 ボランティア・サービスの実践、先見
		食事、入浴、自由時間
その他		開会式、閉会式、オリエンテーション

トレーニング・センターで行われる「特色あるプログラム」 〈ボランティア・サービス(Voluntary Service)〉

自らの意志によって活動するボランティア・サービス(V・S)の時間は、トレーニング・センターにおいては、参加者全員が互いに快適な生活を創り出す方法・手段として設けられたものです。さらに、メンバーはボランティア・サービスを身をもって体験することによって、「気づき、考え、実行する」態度を養うことにもなります。

このように、トレーニング・センターにおいては、ボランティア・サービスによってなされた仕事そのものの成果もさることながら、自主性、自発性ある態度を育成するという教育的効果が重要視されています。

(ボランティア・サービスの詳細はP22 を参照のこと。)

〈先見(せんけん)〉

「先見」とは、いつ、いかなる事態に直面しても、これに対処できるよう日頃から備えておくという意味です。

トレーニング・センターに「先見」の時間が組まれているのは、参加者が何を学び、どのように行動するかを自分自身で考え、そのための準備をするためです。学んだこと、気がついたことをメモにとる習慣をつけておく「先見」の時間にこのメモを役立てることができます。

具体的には、「先見」の中で、これまでに学んだことを整理したり、次のプログラムで自分がどのように行動し、どんな点に留意するかなどを考えることができます。このように「先見」とは、単なる予習・復習の時間ではなく、ましてや自由時間でもありません。

すなわち、「先見」とは、集団の中で生活するトレーニング・センターの中で自分自身を取り戻し、反省と共に今後に取り組む段どりと余裕を得る時間として、自分の考えを明確に把握し、これからの自分の学ぶ態度を決定する重要な時間と言えます。このように子ども達に気づき、考えさせる「先見」の時間は、他の団体で行われる研修プログラムには見られぬ特色あるものと言えるでしょう。

基本的には、先見を行う場所は、居室以外の公共スペースとしていますが、参加者の発達段階に応じて、初日は全員が会議室に集まり、2日目以降は公共スペースのどこを使用してもよいというように、運用面で変化をつけて行うことも考えられます。

また、一日の終わりのホームルームで、その日の先見について有意義に活用できたかをフォローすることも大切です。

〈フィールドワーク(Field Work)〉

フィールドワーク(F・W)とは、ハイキングの途中に種々のゲームを取り入れたもので、全員が小グループ(10人前後)に分かれ、グループごとにあらかじめ決められた指示に従い、統一ある行動をするものです。

トレーニング・センターで得た各種の知識・技術を野外において、グループの仲間と実習することによって、注意力を養い自他の関係の協調と親ほくを増進させるねらいがあります。また、野外の美しい自然に接しながら、トレーニング・センターで学んだ知識、技術、態度を実際にどれだけ身につけたかを知るよい機会でもあります。

4 学習活動について

学習計画の策定

- (1) 学習計画は、小、中、高校の校種別に、参加者の理解度や経験などを考慮しながら内容を策定します。

限られた期間(日程)なので、あれもこれもと盛り込むのではなく、そのトレーニング・センターがねらっている目的や課題を考慮して「これだけは参加者に学んでほしい」という主題を組みこむようにします。

- (2) 青少年赤十字活動のリーダーを養成するので、「赤十字と国際人道法(ジュネーブ諸条約)」と「青少年赤十字」の学習は、かならず科目として組みこみます。

「赤十字概論」および「青少年赤十字概論」として指導すべきポイントは次のとおりです。

① 赤十字概論(学習)

小学生対象		中学生対象		高校生対象	
内 容	資 料	内 容	資 料	内 容	資 料
赤十字のはじまり		赤十字の起こり		赤十字の誕生	
○ デュナンの働きについて「赤十字の父アンリー・デュナン」を中心に紹介する。	○ 「赤十字の父アンリー・デュナン」 光村図書国語教科書の復刻冊子 ○ 青少年赤十字指導者手引	○ デュナンは北イタリアの戦場でどんな働きをし、また何を考えたかを説明する。 ○ ジュネーブ諸条約はどのようにして発足したか、その背景、並びにジュネーブ諸条約(国際人道法)の基本精神を考えさせる。 ○ 国際人道法という用語についても説明する。 ○ 赤十字基本原則にも触れる。	○ 青少年赤十字指導者手引 ○ 「赤十字の父アンリー・デュナン」 光村図書国語教科書の復刻冊子 ○ 「赤十字と国際人道法―普及のためのハンドブック」の一部	○ ソルフェリーノの戦いとアンリー・デュナンの活動について述べる。 ○ 「ソルフェリーノの思い出」によるデュナンの訴えが、次第に実を結び「五人委員会」へと発展してゆく過程を話す。 ○ 最初の国際会議と赤十字規約、赤十字条約に触れたあと、これらが今日発展して、ジュネーブ諸条約(国際人道法)になっていることを説明する。あわせて、人道法の精神と基本的ルールを理解させるとともに、赤十字基本原則との関係も説明する。 ○ 特に、国際人道法という用語を理解するとともに、戦争犠牲者(軍人の傷者、病者ばかりでなく、捕虜、一般文民を含む)に対	○ 青少年赤十字指導者手引 ○ 「ソルフェリーノの思い出」 ○ 「赤十字と国際人道法―普及のためのハンドブック」

				し、人種、国籍、階級、宗教、政治的見解の差別なく看護、保護を与え人の命と尊厳を尊重しようという条約の根底にある精神を理解させる。	
国際赤十字とその働き		国際赤十字の組織と活動		国際赤十字の組織と活動	
上記の話から、赤十字成立と下記の点について説明。 1. 赤十字のしるしとその意味 2. 国際赤十字の働き、よく知られている活動について話す。	○ 青少年赤十字指導者手引	○ 赤十字のしるしにはどんなものがあるか(赤十字、赤新月、レッドクリスタル(日本語訳検討中)) ○ 赤十字国際委員会と国際赤十字・赤新月社連盟の組織と役割について、性格が異なることを確認させる。 ○ 各国赤十字社については現在世界中にいくつあるかぐらいに話をとどめる。	○ 青少年赤十字指導者手引 ○ 赤十字の国際活動 ※ 赤十字国際委員会承認各社は189カ国(2013年8月現在)	○ 赤十字国際委員会、国際赤十字・赤新月社連盟、各国赤十字社の関連と役割を説明すると同時に、それぞれの役割に合わせてどのような活動をしているか述べる。 ○ さらに赤十字国際会議にまで触れる。	○ 青少年赤十字指導者手引 ○ 赤十字の国際活動
日本赤十字社の起こり		日本赤十字社の起こり		日本赤十字社の創立	
○ 佐野常民・大給恒が日本赤十字社の前身である博愛社を創立したことを話す。	○ 青少年赤十字指導者手引	○ 佐野常民・大給恒が日本赤十字社の前身である博愛社を西南の役のとき創設したこととその意義を説明する。	○ 青少年赤十字指導者手引	○ 佐野常民・大給恒が西南の役でどんな活動をしたか、また博愛社はどんな目的でつくられ、どのような役割を果たしたか説明する。	○ 青少年赤十字指導者手引
日本赤十字社の活動		日本赤十字社のしくみと活動		日本赤十字社の組織と活動	
○ 児童には自分達の住んでいる周辺で赤十字のマークを見かけたことがあるか、それはどこにあったか、などの身近なところから話をすすめる。	○ 青少年赤十字指導者手引 ○ 赤十字の使命と活動	○ 日本赤十字社の社員とはどのようなものなのか、また、本社と支部とはどのような関係にあるかを説明する。	○ 青少年赤十字指導者手引 ○ 赤十字の使命と活動	○ 日本赤十字社は日本赤十字社法(昭和27年制定)により設立された法人であり、社員によって組織されていることを確認させる。	○ 青少年赤十字指導者手引 ○ 赤十字の使命と活動

○ 赤十字のしるしが付いている赤十字病院からは医療事業を、街頭で見かける献血車からは血液事業を、手短かに説明する。		○ 下記の活動を簡単に説明するとともに、国際的国内的にも広範囲にわたって赤十字が活動していることを認識させる。 ・国際活動 ・災害救護 ・血液事業 ・医療事業 ・看護師の養成 ・救急法等の講習 ・赤十字奉仕団 ・青少年赤十字 ・社会福祉 ・その他の事業	○ 下記のそれぞれの活動について解説する。 ・国際活動 ・災害救護 ・血液事業 ・医療事業 ・看護師の養成 ・救急法等の講習 ・赤十字奉仕団 (特に青年赤十字奉仕団を詳しく) ・青少年赤十字 ・社会福祉 ・その他の事業 全体の補足とまとめとして、赤十字＝病院ではなく広範な活動が行われていることを教える。特に青少年赤十字メンバーとして、これらの活動との関連や、知識・技術の活用を意識させ、今後の具体的活動を考える基礎とする。	
---	--	--	--	--

② 青少年赤十字概論(学習)

小学生対象		中学生対象		高校生対象	
内 容	資 料	内 容	資 料	内 容	資 料
青少年赤十字について		青少年赤十字の誕生と組織		青少年赤十字の歴史と組織	
○ 青少年赤十字の起りりと目的を、ここでは簡単に触れることとし、具体的には、第1次大戦のアメリカ、カナダ、オーストラリアの子どもたちの行動を通して、青少年赤十字がどうして学校にあるのかを説明する。	○ 青少年赤十字指導者手引	○ 第1次大戦時に、アメリカ、カナダ、オーストラリアの子どもたちが、戦争犠牲者を励ますために自分たちの手作りの作品を送ったことが1つのきっかけになり、世界の平和実現を目標にして赤十字の平時事業の柱の1つとして青少年赤十字が発足したことをまず確認させる。	○ 青少年赤十字指導者手引	○ 青少年赤十字の起りりのきっかけとなった第1次大戦時の子どもたちの行動を手短かに説明する。 ○ さらに、青少年赤十字が、「子どもたちに平和の理想、健康への注意、奉仕の実践、人間としての責任、そして世界中の子どもとの親善、理解」を願って発足したことを理解させる。	○ 青少年赤十字指導者手引

○ 3つの実践目標についてこれがどうして、特に、3つの実践目標としてとり上げられているかを述べる。		○ 現在、青少年赤十字は学校を単位として活動し指導者は学校の先生がなっていることを説明する。		○ 学校単位で活動が行われているが、県、地区の協議会を通して、横のつながりもあること、さらに、指導者の先生と支部の職員も活動上の相談にのってくれることをよく説明する。	
青少年赤十字の活動		青少年赤十字の活動		青少年赤十字の活動	
○ 上記の3つの実践目標に関連づけながら、青少年赤十字で一般的に行われている活動を、指導者手引の活動欄を中心に話を進める。 ○ 特に、トレーニング・センターに取り入れて実際に児童にやらせようとするものについてはその活動の主旨とやり方を説明、指導する。 (例、アルバム作製、お見舞カード、作品、絵画など)	○ 青少年赤十字指導者手引	○ 現在、自分たちが行っている活動を青少年赤十字の3つの実践目標に合わせて図示してもらい、それを解説する形で、それぞれの活動のねらいをはっきりと自覚させる。		○ 現在行っている活動を分析・評価して、これからの活動のあり方をさぐす方向に、生徒の発表を取り入れながら話を進めていく。 ○ この時間が、さらにワーク・ショップへ結びつくよう指導する。(P28 参照) ○ なるべく講義形式をさけて、小グループでの研究会形式、バス・セッション、ブレイン・ストーミングなどで話を進めて行くことが大切である。	○ 青少年赤十字指導者手引

- (3) 学習の主題をどのように展開するかは、指導スタッフの工夫を最も要するところですが、中心的な科目については講義によることとしても、できる限り参加者自身の主体的な学習活動を促すために、グループワーク(G・W)の手法を導入して展開するなどの方法を考えます。
- (4) 技術研修として、青少年赤十字の特色あるプログラムのひとつである「健康安全プログラム」に沿った救急法等の講習をできる限り取り上げます。技術の習得それ自体をねらいとするのではなく、小・中学生対象であれば健康安全プログラムを利用するよう、高校生対象であれば帰校後に正規講習会を受講するよう、動機づけの機会とします。
- (5) レクリエーションの取り扱いに留意する。

レクリエーションの本来の役割は、気分転換や雰囲気づくりに大きな効果をあげることです。しかし、いつの間にか、レクリエーションが主人公となった日程が展開されている例もしばしば見られます。「たのしい」ということは、一人ひとりが、心身ともに安心して生活できるということであって、歌を歌わせたり、大笑いさせたりすることではありません。

レクリエーションの時間は、最小限にとどめます。
- (6) 野外活動も参加者の興味と関心をひく重要な学習プログラムです。キャンプ・ファイヤー、フィールドワーク、自然観察などを、プログラム全体の構成や参加者の体力などに配慮し、実施します。
- (7) このほか、ビデオや映画上映、フォーラム、ディベート、施設訪問の体験学習、会場周辺地域の社会資源マップの実習など、種々の学習計画が考えられるでしょう。

学習活動展開上の指導留意点

- (1) 全ての学習活動の基本を、「自分にとり組む」(自分の考えや体験から出発する)ことにおきます。
- (2) 青少年赤十字の実情をふまえた問題意識をもとに学習展開を行います。センター終了後、それぞれの学校で生かされないことを言ったり、行ったりしてもあまり意味がありません。
- (3) グループワークなどを取り入れた学習展開を行います。その技法の形式や流れにこだわって画一的な結論に陥ることのないように留意します。
- (4) 学習の主題について、それぞれ担当スタッフがきめられても、実際の展開にあたっては、スタッフ全員がこれに当たることとなるので、常に「主題に対する共通理解」を図ります。
- (5) 教材、教具の用意と活用。

5 トレーニング・センターの生活運営と指導

トレーニング・センターの「生活」

- (1) トレーニング・センターは、参加者が寝食をともにする共同生活です。
しかし、また、参加者一人ひとりが、できるかぎり自分の日常生活と変わりのない暮らしのペースを保つという考慮も大切です。
例えば、限られた期間だからということで、日程の都合上、睡眠時間を短縮してしまうなどということは避けます。
- (2) 反面、トレーニング・センターという生活の場でなければ得られない体験の機会であるという指導も大切です。
- (3) 明るく、また、しっかりと落ちついた生活がおくれるように雰囲気づくりにも気を配ります。
このためには、参加者全員が集団生活の規律とエチケットを守るよう指導します。
- (4) トレーニング・センターの「生活」は、全てが学びの場であるという考え方を大切にします。

トレーニング・センターの一日の流れ(例)

6:00 起床 洗面・身じたく(移動)	◇ 寝具の整理、洗面 居室の清掃
7:00 朝のつどい	◇ 所定の場所に全員集合 人員点呼(HRごと) 旗あげ あいさつ 体操(散歩・その他の企画) ホームルーム連絡員からの連絡など
7:30 朝食・自由時間	◇ 食事(セルフサービス) たのしく食事をしよう。 ◇ 食事後は自由時間 「自由時間」とは、なにもしなくてもよい時間ではなく、 なにかを選んでする時間です。(V・Sや、スポーツなど)
8:30 先見の時間	◇ 先見の時間……1人で考える 個人思考の時間 今日一日の日程の確認 今日一日の行動・課題について考えてみる。 (紙と筆記具を用意)

9:00 学習の時間	◇ 毎日、種々の主題によって展開される。学校・地区・県の 青少年赤十字の伸展のため、積極的に学習に参加しよう。
12:00 昼食・自由時間	◇ 朝食と同じ
13:00 V・S タイム	◇ HRの時間に書いたV・Sカードに従ってV・Sコーナーに 集合、個人またはグループで実行のための企画(相談・打合せ)や 求人募集もしてみよう。 決定したら具体的な行動を。
14:00 学習の時間	◇ 午前の学習時間と同じ
17:00 ホームルーム	◇ ホームルーム毎に集まる。ホームルームは、 参加者の基本的な生活行動の単位です。 みんなで協力して、たのしい生活を築く努力をしよう。 次の順序で進行する。 ・ ホームルーム連絡員、記録係(各1人)の選出 ・ 一日の反省、提案など ・ V・Sカードの記入、一日のまとめ、整理
18:00 夕食	◇ 朝・昼食と同じ
19:00 学習・夜の集い	◇ 学習や交歓の集い
20:30 ホームルーム 連絡会議(移動)	◇ 日程進行上の連絡・調整の時間 日直の選出(毎日交替) 各ホームルームからの連絡発表 調整 本部からの連絡
21:30 入浴・生活整理	◇ 入浴 風邪をひかないように注意しよう。
22:00 就寝・消灯	◇ 生活整理 一日の生活をふり振り返り、まとめてみる。 静かに就寝準備をしよう。

朝の集いと夕べの集い

一日の始まりにあたり、参加者全員が一堂に会し、お互いの健康状態を把握し、体をほぐし、プログラムへの参加意識をたかめることを目的として行います。

また、青少年赤十字旗の降納を主目的として、夕べの集いを行うことも考えられます。

朝の集いの進行例

- ホームルームごとの人員点呼

ホームルームのメンバーが全てそろっているか、体調が悪く居室等に残っているメンバーがいないかなどを確認することがねらいです。

- 青少年赤十字旗の掲揚

青少年赤十字メンバーとしての意識を高めます。正しい旗の掲揚ができるかもポイントです。

「空は世界に」等を歌いながら行ってもよいでしょう。

- 進行者からのあいさつ等

- 体操

散歩など、過度にならない程度のものがよいでしょう。

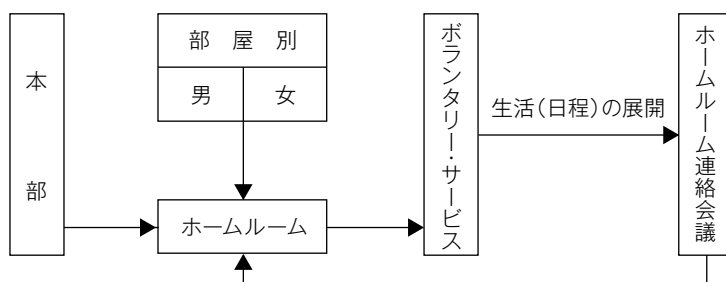
- 必要に応じて参加者への連絡

・ 朝の集い、夕べの集いともに、集いの意味を考えて内容を選別します。

安易にレクリエーションの時間とならないように注意しましょう。

・ 旗はその団体のシンボルとしての意味を持つので、地面を引きずったりすることのないよう、丁寧に扱うように注意します。また、雨が降ってきた場合は速やかに降納します。

生活組織と運営



ホームルーム

家族的な雰囲気の中で参加者が自分の考えや反省、疑問などを自由に話し合い、必要があればスタッフから助言を得る時間がホームルームです。一日の生活の中で気づいたこと、考えたことを出し合い、建設的に処理してまとめていく過程で、自発的な生活態度を促し、

各人の抱える課題を浮き彫りにさせていただきます。

従って、その日毎の学習プログラムの内容と呼応させ、参加者の消化の度合いを見極めながら毎日のホームルームのねらいを考える必要があります。単に一日の反省をするためだけの時間とせず、集団生活の中でも自分の殻を脱いで相互理解・自己啓発を図ることができる打ちとけた場とすることが大切になります。

ホームルームは、1ホームルーム10人前後が適当です。ホームルームでは、ホームルーム連絡員を選出しその人を中心にしてホームルームでの生活を行います。

ホームルームで話し合う事項(例)

- 自己紹介
- ホームルーム連絡員・記録係(各1人)の選出
- オリエンテーションの確認
- V・S活動の奨励
- トレーニング・センターの1日の反省
- 情報交換、その他共通の話題
- ホームルーム連絡会議への要望

ホームルーム連絡会議

ホームルーム連絡会議は、各ホームルームからホームルーム連絡員が参加して行います。ホームルーム連絡会議では以下のことを行います。

1. 日程の反省(研修および生活面)
2. 日直の選出および交代
3. ホームルームから提出された事項の確認等
4. 日程その他本部に対する要望の提出
5. 本部からの連絡

しかしながら、ホームルーム連絡会議は、生活運営上、特に全体に関わる問題について連絡調整をする場であり、何かを決定する場(議決機関)ではありません。

トレーニング・センターでは、生活運営の全てを参加者の自発的な意志に基づく行動に期待しており、ホームルーム連絡会議で必要が発見されたとしても、それはホームルーム連絡員が自らの意志によるボランティア・サービスとして、また、多くの場合は掲示などによる協力呼びかけで解決することができます。

従って、個人やホームルームで解決できるような問題はこの場には持ち出さないようにします。

しかし、参加者が小学生の場合と高校生の場合では、自ずとホームルーム連絡会議の運営が変わることも考えられます。参加者が小学生の場合に、出された話題がホームルーム連絡会議にふさわしいかを、指導者がそのつど検討してもあまり意味がありませんが、高校生メンバーのレベルになれば、出された話題が本当にホームルーム連絡会議に必要なものをじっくり考えさせることも大切な場合があります。

(注) 日直の仕事

- ・ 日程の進行
- ・ 本部との連絡
- ・ ホームルーム連絡員の掌握
- ・ ホームルーム連絡会議の議長

日直からの伝達は緊急なことを除いて、できるかぎり掲示板を利用して伝達を行います。

ボランタリー・サービス (V・S)

ボランティアの語源は、ラテン語のVoluntas(自由な意志free will)から来ています。もとは、非常の際に、祖国のまもりとして義勇軍に自ら志願した人たちのことを意味していましたが、その後は、社会の矛盾や現実を改善したいと、文化・産業・教育・保健・福祉など、あらゆる面で自らの意志によって活動する、有志の人びとを意味するようになりました。

青少年赤十字というボランタリー・サービスとは、自他が「ともに生きる」ための自発的な活動のことです。相手の立場にたち、相手の身になってその気持ちを理解し、自分の能力に応じて、できる限りこれにこたえていこうという、いわば人道を日常生活で実践するために児童・生徒の人的成長を期待するものといえます。

トレーニング・センターにおけるボランタリー・サービス(V・S)の活用

トレーニング・センターは、参加者一人一人が自主的に運営していくものであり、そのためにはボランタリー・サービス(V・S)の活用が大切なものとなります。

V・Sは本来、自らの意志によって活動するものであり、設定された時間の枠だけで行うべきものではありませんが「自主性もまた育てられなければならない」の言葉通り、参加者にV・Sを身をもって体験させることにより、参加者の自主性・自発性を育てることが大切です。このためには、日程の中にV・Sの時間を設けることが重要になります。

指導する側では、V・S活動をすすめるにあたっては、十分にオリエンテーションを行うとともに、あらかじめV・Sとして考えられる仕事の内容を分析し、それらのV・Sの相談にあたるスタッフを決めておきます。

V・S活動は、参加者の自発的な活動を待ちますが、V・Sを意義あるものにするためには、どのような仕事をなぜ行いたいのかをはっきりと自覚させるために、V・Sカードを利用します。

V・S活動をするときには、誰に相談したらよいのか、同じ考えを持っている人がいないかを知るために、ホームルームの時間にV・Sカードに記入し、ホームルーム担当のスタッフに提出してもらいます。

ホームルーム担当のスタッフは、V・Sカードに記入されている仕事の内容によって、相談を受ける場所および相談するスタッフの名前を書いてV・Sカードを参加者に返します。

参加者は決められた時間にそのカードをもって、相談するスタッフのところに集まり、資材、

用具、方法などV・S活動について相談をします。その中には、自分ひとりではできるものと他人の協力を得ないとできないものがあるので、V・S活動について同じ考えをもっている人がいたら、自主的にグループをつくり一緒にV・S活動を行います。V・S活動は決められた時間の他、日程中のフリータイム(自由時間)を利用します。

V・S活動をするために人数が少ないと思われる場合は、積極的に掲示板を利用して協力を求めます。これが「求人広告」です。自分でV・S活動の仕事が見つからなかった場合は、掲示板の「求人広告」に気をつけ、他の参加者のV・S活動に参加します。

V・Sカードは毎日提出してもらい、その活動が一日で終わらないものについては継続して行います。

メンバーの発達段階(校種)に応じて、ボランティア・サービス・カード(V・Sカード)も、使い分けることができます。高校生メンバー対象の場合にはしっかりと問題点を浮き彫りにするように、問題やその原因から書き出すスタイル(図1)を用いることができますが、小学生メンバー対象の場合には、まず自分ができるものからボランティア・サービスを始めるという意味で、図2のように活動内容から書く方法も有効でしょう。

ボランティア・サービス・カード

月 日		時 分	No.
問題の 発見	問題 (Needs) と その原因 (Why)		
問題の 解決	なにを (What)		
	いつ (When)		
	どのよう にして (How)		
() 先生の所へ () の時間に相談に行きましょう。			
自己評価 ・反省			

(図1)

～V・Sカードを使用した ボランティア・サービスの流れ～

- ① 参加者がボランティア・サービスの必要性に気づく。
- ↓
- ② V・Sカードを記入する。
- ↓
- ③ ホームルーム担当スタッフに相談する。
- ↓
- ④ 生活担当スタッフに相談する。
- ↓
- ⑤ ボランティア・サービスを実行する。
- ↓
- ⑥ 自己評価をする。
- ↓
- ⑦ ホームルーム担当スタッフからアドバイスを受ける。

V・Sカード		
V・Sカード 月 日 第 日	HR	この仕事は 先生 の所へ相談に行く
仕 (What)		
い (When)		
どのよう に (How)		
な (Why)		

(図2)

ボランティア・サービス（V・S）展開上の指導留意点

- ① ホームルームでは、活動（ニーズ）の発見（Why、What）、ボランティア・サービス・タイムでは活動の実行（How）を指導のポイントとします。
- ② どんなに小さなV・Sのテーマ（ニーズの発見）でも、その人が気づき、考えたものである限り、大切にします。
- ③ ニーズの発見（気づく）はむずかしく、そこに指導の機会があります。また、ヒントを与え、テーマの発見と発展を助言します。
- ④ V・Sカードをいかに書くかが目的になってはいけません。大切なことは、ニーズを具体的に把握（Why）して、それに応えようと活動することです。
- ⑤ V・S活動に名をかりた、本部からの仕事の強制であってはいけません。
- ⑥ トレーニング・センターにおいてV・S方式を実行しようとするれば、本部スタッフの先見と準備の取り組みも重要になってきます。
どんなニーズが発見され、実行されようとしても、これに応じられる心づもりと具体的な対応が求められます。

健康管理と安全対策

健康管理

- (1) 本部スタッフのなかに、参加者全員の健康管理を担当する専任者を確保します。（看護師、養護教諭など）
- (2) トレーニング・センター冒頭のオリエンテーション時に、自分の健康管理に注意することを伝え、ホームルームの時間などを活用して、参加者の健康状態の把握に努めます。
- (3) 救急箱も用意しますが、緊急時に備え、会場付近の医療機関を確認し、緊急受け入れについて依頼しておくといでしょう。

安全対策

- (1) 会場内外の安全点検を必ず事前に行います。
危険な箇所が発見されたら、補修し、また、参加者に、具体的に周知しておきます。
- (2) 環境が変わり、気持ちが動揺しているときには、スリップやつまずき等の小さな事故が起きやすいので、オリエンテーションで十分に注意を促します。
- (3) 緊急避難経路の確認と避難集合地点を明確にし、周知しておきます。

トレーニング・センターのまとめ

トレーニング・センターが終了したとき、参加者が感激し、別れ難い思いが溢れている様子などだけから、センターの成果を評価することには問題があります。

参加者が、個人としても、学校としても、ここでの体験が、以後の青少年赤十字活動への方向づけとして十分生かされるような指導を心がけます。

- (1) トレーニング・センターの学習や生活の反省評価や感想をまとめさせます。
- (2) トレーニング・センターでの様々な体験を、どのように生かし、実行していくかという“具体的なとりくみ”を期間中にワークショップさせます。
- (3) 本部スタッフの反省評価を必ず行います。

学校活動への活用

トレーニング・センターの体験が、参加者の個人的な成果にとどまらず、学校での青少年赤十字活動に生かされるよう配慮します。

- (1) 学校や地区で必ず報告会を行い、できれば、報告書を作成し配付します。
- (2) 参加者が、他校の参加者との間に得られた友情や交流関係は、その人だけのものとせず、学校間のつながりに発展させます。(アルバム交換や交歓会の開催)
- (3) 児童会(生徒会)、あるいは学級活動などにおいて、トレーニング・センターの成果を生かし、リーダーシップを発揮するよう促します。
- (4) 本部スタッフは、本部解散後も参加者の活動について、できる限りフォローします。

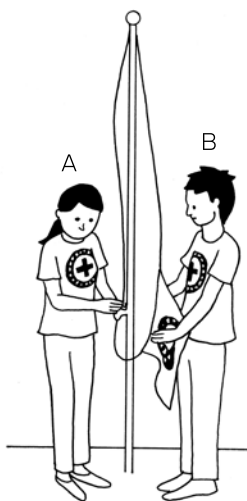
旗の掲揚のしかた

旗はその団体のシンボルとしても意味を持つものなので、

1

2人であげるのが普通で、ポールに向かってAが左、Bが右にならび、Bが旗をもち、Aがロープを綱止めからはずし、2人でロープに旗をつけます。この場合、決して旗のはしが地面を引きずることのないよう気をつけます。また、ポールに向かって右側のロープに旗をつけ、旗がついたら、Aは余分のロープを綱止めにまき、Bはロープに旗をはさんで広がらないようにしておきます。

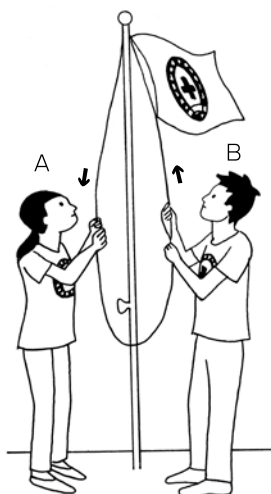
このようにあらかじめ用意をしてから、掲揚の合図を待ちます。



- 旗のはしが地面を引きずることのないよう気をつけます。
- あらかじめ用意をしてから、掲揚の合図を待ちます。

2

合図があったらポール前に2人がならび、Aがロープをほどき、綱がからまっていないか確かめてから、引き綱をAが、旗のついている上げ綱をBがもって立ちます。音楽や歌に合わせて掲揚する時はここで音楽または歌を始め、終わるまでに上の滑車にとどくよう同じ速度であげます。速くなったり遅くなったりしながらあげたり、途中で速度が速くなることのないよう気をつけましょう。音楽が終わっても旗が上の滑車にとどかないことがないよう、旗のあがる速度を調節します。Bは旗がロープにからまないよう気をつけ、なるべくポールに添って旗があがるように注意します。



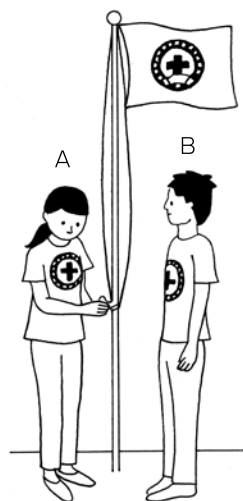
- 旗をあげる時の速度に注意しましょう。
- 旗がロープにからまないよう気をつけ、ポールにそって旗をあげましょう。

3

あげ終わったら、Aは引き綱を綱止めに2、3回巻きつけてから、Bの上げ綱といっしょに8の字に綱止めにまきます。このようにすると強い風の時も半旗(注)にならないですみます。

(注)

半旗というのは、弔意をあらわす旗のあげ方で、ポールの先端の竿頭(玉)から20cmほど旗をさげて掲げることです。

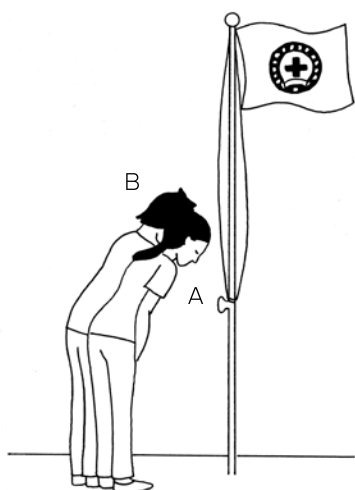


- まず引き綱をとめてから、上げ綱とともに8の字に綱止めにまきます。
- 半旗にならないようにきちんと綱をとめましょう。

大切に扱うよう心がけましょう。

4

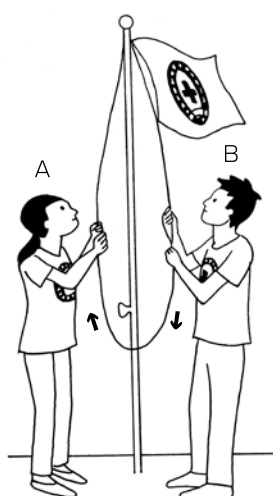
AとBはならんで、旗に対し礼をしてもとの位置にかえります。



- 一礼をしてもとのところへかえります。

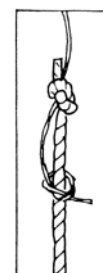
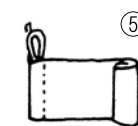
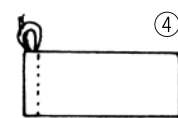
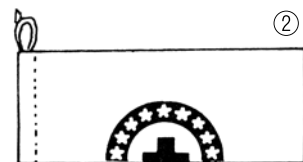
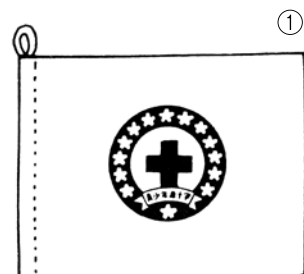
5

旗をおろす時は、Aが綱止めからロープをほどき、2人がロープをもって、Bがロープを引いておろします。旗がおりた時、地に引きずらないよう注意し、旗を2人ではずし、Aがロープを綱止めに固くまいてとめます。旗をきちんとたたみ、保管場所に保管します。

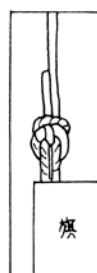


- 旗をおろした時も旗が地面に引きずることのないように気をつけましょう。
- 旗はきちんとたたんで保管しましょう。

旗のたたみ方



← 旗の下部ロープのつなぎ方



← 旗の上部ロープのつなぎ方

ワークショップ(W・S)

プログラムの意味

プログラムは本来、ある目標を達成しようとする計画(Plan)を意味しますが、それだけではなく、目標を達成するために実施(Do)されている最中は、メンバーが相互に充実感を味わう媒体としての働きを持ち、実施し終われば、評価・反省(See)の対象となり、さらに次の準備をするための情報・資料へと変化して行きます。すなわち、プログラムとは、ある目標を達成するための単なる手段や目標をいうのではなく、計画から評価・反省までを含めた全過程であるといえます。

プログラム・サイクル

プログラムの発案にあたっては、グループの目的は何かをしっかりと認識したうえで、自分たちの関心や期待がどこにあるのか、対象がいる場合には対象者が何をしたいと望んでいるのかを知り、目標を定めて、その目標を達成するために可能な方法についてアイデアを出します。

次に、参加できる人数、目標を達成するために必要な知識や技能、実行可能性などを考慮して、最も適当と思われるものを選んで具体的な活動計画であるプログラムを作成します。これがワークショップです。

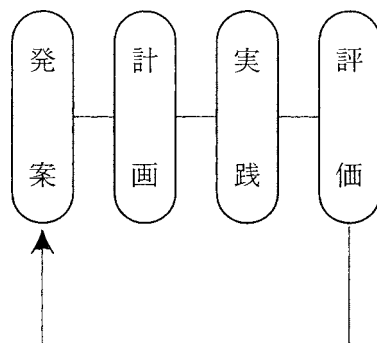
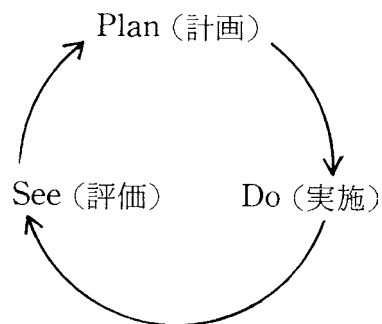
次にプログラムにしたがって実行し、実行した後は、評価、反省し、次のプログラムに生かすようにします。

ワークショップとは

いくら素晴らしいアイデアであっても、それを実行に移すことができれば何にもなりません。

また、あるひとつのことを実行しようと思っても、十分な企画と準備がなければそれを効果的に行うことはできません。

ワークショップとは、具体的な実行案づくりのことで5W1Hがその代表的手がかりとして使われています。



What	何をするのか(主題)
When	いつするのか(日時・時間)
Where	どこでするのか(場所)
Who	だれがするのか(参加者) だれに対してするのか(対象者)
Why	なぜするのか(趣旨・目的)
How	どのようにするのか(方法・手順)

ワークショップの作成上の注意

- (1) 具体的な目標・計画を持っていること。
- (2) その活動が小さなものから大きな夢につながるものであること。
- (3) グループが協力するものであること。
- (4) 人間の交流がはかれるものであること。
- (5) 周囲の人々と協力してできるような活動であること。(計画、実行、反省まで)

ワークショップ指導上の注意

具体的な活動計画づくりとしてのワークショップは、個人で行う場合とグループで行う場合とがあります。参加者一人ひとりに行動を促すには、一人一作のワークショップがもっとも有効ですが、同じ学校から参加したメンバーが、トレーニング・センター終了後、共同して実行できるような場合には、グループとしてワークショップを行うこともできます。

スタッフはワークショップの最中、相談コーナーを設けるか、あるいはホームルームの先生が、参加者の相談に積極的に応じることが必要であり、その相談は参加者がある程度ワークショップを進行した段階で行うことが効果的です。相談コーナー開設の日時と会場、助言者(スタッフ)については、あらかじめ参加者に知らせておきます。

ワークショップを行うにあたっては、参加者に十分なオリエンテーションと助言者、資料を用意します。それぞれのワークショップができたなら、グループあるいは全体で集まり、互いに意見の交換、発表をし、各人が自分のワークショップの参考とし、さらによりよいものにすることも可能です。

また、スタッフは、このまとめの時間を利用して、参加者にワークショップを実施する際の「諸注意」と、相談に応じた際の「意見」と「反省」なども付け加えます。

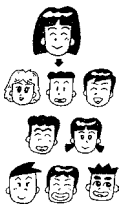
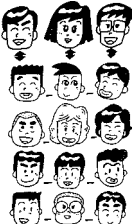
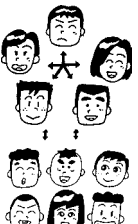
グループワーク (G・W)

グループワークとは、グループの活動を通して、メンバー各人の個性の成長・発達を促す方法です。グループワークを実施するにあたって、特に大切なのは指導者の役割です。グループワークの主人公はあくまでもグループのメンバー一人ひとりなので、これらのメンバーの自主性・自発性を大切にして、彼らの意見をできるだけ生かし、建設的な方向へ実を結ぶように、指導することが肝要です。すなわち、指導者は助言者として、グループのメンバー個人のやる気とグループの組織としての盛りあがりとうまく、正しい方向へもってゆき、それがグループ全体の成長につながるような指導を心がけるべきでしょう。

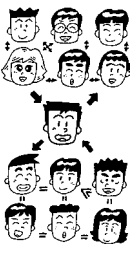
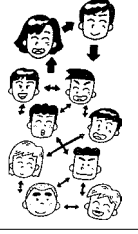
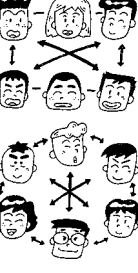
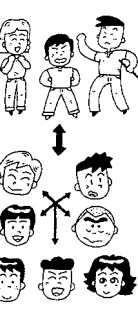
グループ・ディスカッション

グループワークをより効果的に行うためには、さまざまなグループ・ディスカッションのやり方が考えられますが、それぞれのねらいと長所・短所を考慮して採用します。

トレーニング・センターでよく用いられるディスカッションの方法は、次表のとおりです。

形 式	特色・手法	人間相互関係	長 所	短 所	摘 要
講演 Lecture	・「知らせる」目的に適う。		・限られた時間内で、知識の系統だった提供ができる。	・人間は聞くことから20%しか学ばない。 ・聴衆の参加度が低い。	・自主性・自発性を育てるためには、他の方法を併用すること。
フォーラム Forum	・専門家の講演の後で、聴衆との質疑応答を加える。 ・講演者は2・3人の場合もある。この場合、主題は同じでも立場の違う人の参加をおくこと。		・聴衆は、自分が特に興味のある点について、一層知識を得ることができる。	・固くなるしづなりがち。 ・自由な意見の交換まではいかない。 ・会場の大きさや多人数からくる圧迫感が作用する。	・同上
シンポジウム または パネル討議 Symposium or Panel Discussion	1. 司会者がパネル員を紹介する。 2. 各々の意見を短時間で発表する。 3. もうひとまわり、追加発言をする。 4. パネル員で討議をする。 5. パネル員と参加者の質疑応答		・見解の相違が問題に対する興味をそそり、参加が活発になる。	・不用意にはできない。準備を要する。 ・経験ある司会者と種類に富んだパネル員の選択に苦労する。	・事前に、司会者とパネル員との間で打合せが要る。 ・しかし、余り用意し過ぎると本番に活気がなくなる。

Junior Red Cross

組分聴取法 Critical Audience Listening Teams	- 漫然と講演を聞くのではなく前もって、グループ別に問題意識をもって聞いた後、問題別にグループ討議をする。 - 問題別に講演者に質問してもよい。		聴取効果が大きい。	組分け別の問題が適切でないと、どうしてもわざとらしくなって実感がわかない。	問題例 A.疑問な点は何か? B.不賛成な点は何か? C.もっと調査を要する点は何か? D.自分もやってみたい点。 E.自分の経験やエピソードの事例を加えてみる。
インタビュー Interview (Group Interview)	聴衆を代表する1名～2名の質問者に質疑をまとめてもらい、専門家の応答を得る。		時に応じた意見や事実を、専門家から得られる。	質問の整理と用意がよくなないと、散漫になる。	- 質問はあらかじめ聴衆から集め、整理しておく。 - 質問を出すのは、個人単位でも、バス・グループ単位でもよい。 - 紙片に書いて出す場合1紙片1問が整理に便利。
井戸端会議 バズ・ディスカッション (セッション) 6・6システム Buzz Discussion (Session) 6・6system	大会合でも小人数グループ(6～8名)に分けて討議することにより、100%の参加が得られる。		- 全員が討議に参加できるのでグループの熱意が高まり、年齢や経験の差を越えて打ちとけた気分になる。 - 大会合でも利用できる。 - 全員がリーダーの経験ができる。	全体会議に報告し、またグループに戻して問題を煮つめる。このフィードバックの作業をくり返さないと主旨が徹底しない。	最も応用範囲が広い。どの会合にも応用して、最大の参加を得るべきもの。 司会者 リーダー 記録係 レコーダー 観察係 オブザーバー 助言者 リソース・パーソン を あらかじめ訓練するとおよい。
ロール・プレイング Role Playing	- 身近な問題をその場で劇化してみることで、 - 問題の把握や定義 - 問題の診断 - 解決策のテストなどに役立つ。		観察を通じて問題を客観的、具体的に捉えて考えることができる。	演出のための、気分が必要となる。つまり導入をうまくしないとのつてこない。	- 主題は実際の身近なはっきりしたものがあること。 - あまり説明をしないこと。アクションでしめす。 - 演出の長さは2分～20分とし、クーツと笑ったところで止めること。 - 準備は不要。当意即妙が大切。 - 役の振りあてに十分に配慮する。

フィールドワーク(F・W)

目的

フィールドワークはハイキングの途中にチェックポイントを設け、種々のゲームをとりいれたもので、全員が小グループ(10 人前後がよい)に分かれ、グループごとにあらかじめきめられた指示に従い、決められた行程で統一された行動をとるものです。講習会で得た各種の知識・技術を、野外において、グループの人々と組んで実習することによって、注意力を養い、自他関係の協調と親睦を増進させるねらいをもっています。

ルール

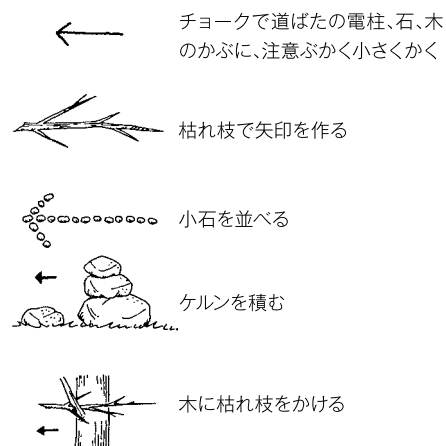
あらかじめサインを定め、それに従って行動します。

枯れ枝や石などで作ったサインは素朴ですが、自然に親しむ学習に適しているでしょう。

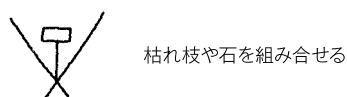
車や他の通行人に壊されないよう、適切な場所に設置するようにします。

フィールドワークサイン

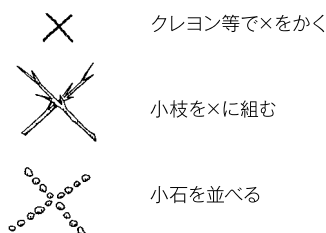
矢印の方向に進め



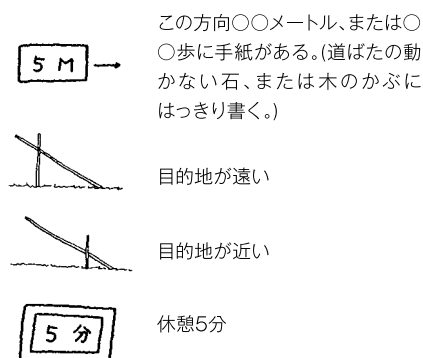
危険・近づくな



この道ではない。ほかの道のサインをさがせ



その他のサイン



注1. サインの脇には赤十字マーク・日付をつける。 注2. 木を折るなどのサインは自然保護のためにやめる。

事前指導

各グループの人数、健康状態の確認、帽子、タオル、手袋、はき物の注意を行うとともに、フィールド・ワークの意義、活用、行動の方法などについて、十分に話をしておきます。

自然の美観をそこなわないよう留意させることや、所持品はバックに入れ、手を使えるように指導します。

グループで、歩く際に注意する方向(前方、左右等)を分担し、お互いに協力してサインを見落とさないようにします。最後のグループはサインを撤去し、指導者は必ず撤去の確認をします。

・指導者の準備品

救急品、三角巾、鉛筆、マジックインキ、画用紙、更紙、etc.

コース

事前に指導者は実習コースを一巡して、チェックポイントをどこに、どのように設置するのかを検討するとともに、危険箇所、所要時間を確実につかんでおきます。

コースは小学生の場合2～3km位が適当ですが、中・高校では経験を加味し延長してもよいでしょう。

チェックポイントは5～6カ所程度を設け、その内容は考えるゆとりがもてるようにし、あまりこりすぎたり、苦しめる「しかけ」を多くすることは避けます。

関所の例

チェックポイントの内容に一定の型はなく、青少年赤十字の目的や活動などをいれるとよいでしょう。一例をあげると、

- (1) 青少年赤十字の誓いをはっきりと正しくいう。
- (2) 奉仕、親善、健康のいずれかを実践する。
- (3) 略画リレー(絵伝令)
- (4) スケッチ(自然に親しませる)
- (5) 設定されたテーマに沿った俳句、短歌の創作
- (6) 無言の国(一定距離を無言で歩く)
- (7) 暗闇体験(目かくしをし、一本の細ひもをたよりに、グループではなれないように協力して進んでいく。途中、障害物に対し次々に申し送りをする)
- (8) 救急法、水上安全法等の一部実習
- (9) 置き手紙による指示通りの行動
- (10) 講義の一部の復習

などが考えられる。

評価

各グループに通過証を渡しておいて、チェックポイントでスタッフに提出し、スタッフは必要事項を記入し、通行手形とします。

フィールドワーク終了地は出発地点もしくはなるべく景観の良い場所とするとよいでしょう。

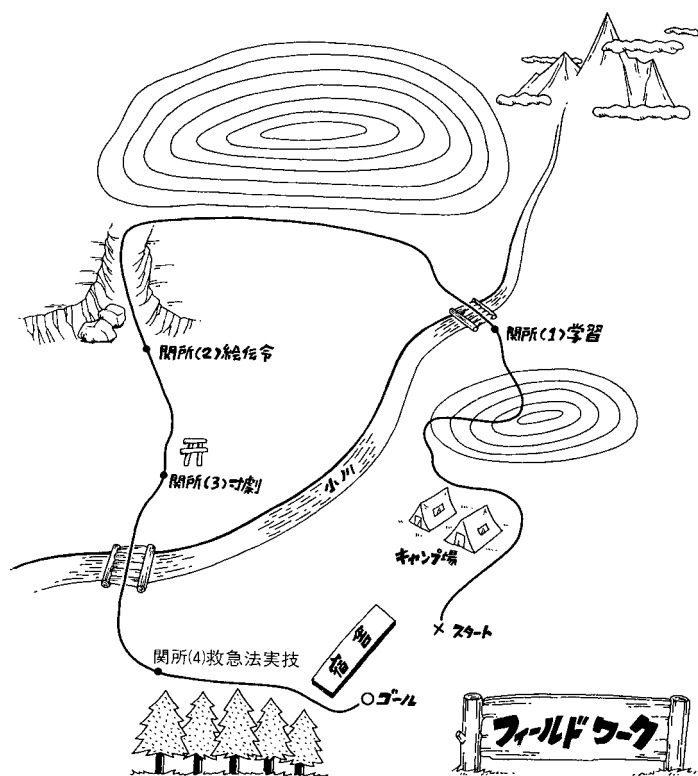
後に食事等の時間を利用してあまり順位や成績にこだわらずにユーモラスに楽しく講評を行うことが有効です。評価はなるべく点数で記すのではなく、動物、植物、山、人気歌手などの名前に置き換えて評価するのも一案です。

〔例〕

フィールドワーク通過証				
番号	関 所 名	関 守 名	評 価	次の関所への連絡
1				
2				
3				
4				
5				
グループ名				

※雨天の場合は、学習したものを生かして、工夫をこらし、室内で行えるものに切りかえる。

フィールドワーク設定例



空は世界へ

そーらは せかいへ つづいてる

そーらは せかいを だいて いる みんな

ごらんよ あ のー そらー をー

そーらが ぼくらの わたしらの ところよ

ところよ しょうねん せきじゅう じー

空は世界へ

杉江健次 作詞
杉江健介 作曲
橋本国彦

- 一、 空は世界へ つづいてる
空は世界を だいている
みんなごらんよ あの空を
空が僕らの 私らの
ところよ心よ 少年赤十字
- 二、 花はだれにも 匂ってる
花はやさしく 匂ってる
みんなごらんよ あの花を
花が 僕らの 私らの
すがたよ姿よ 少年赤十字
- 三、 星はどこでも 光ってる
星は伸よく 光ってる
みんなごらんよ あの星を
星が 僕らの 私らの
ほこりよ誇りよ 少年赤十字
- 四、 旗は十字の 愛の旗
旗はかがやく 愛の旗
みんなごらんよ あの旗を
旗が 僕らの 私らの
しるしよしるしよ 少年赤十字

青少年赤十字の歌

あけそめる おおぞらに みなぎるひかり あふれるいのち

われらわ こうど われらわ こうど ー け

ん こうのあ しなみそろえ すすむの だか がやくみちを

ひとす じーに かが やくみ ちーを ー

青少年赤十字の歌

田中進兵衛 作詞
山田 耕筈 作曲

一、明けそめる 大空に

みなぎる光 あふれるいのち

われら若人^{わこうど} われら若人

健康の足並そろえ

進むのだ かがやく途^{みち}を

ひとすじに かがやく途を

二、さしのべる手を 組んで

あわせる力 つらぬくまこと

われら若人 われら若人

清純の ちかいにこぞり

尽くすのだ 世界のために

人のため 世界のために

三、海こえて へだてなく

呼び合う心 ゆき交うこだま

われら若人 われら若人

親善の 結びもかたく

仰ぐのだ 十字の旗を

ひるがえる 十字の旗を

青少年赤十字
トレーニング・センター・ガイドブック
指導者

昭和62年5月31日 初版発行

平成25年8月20日 18版2刷発行

編集者 日本赤十字社 総務局 組織推進部

青少年・ボランティア課

〒105-8521 東京都港区芝大門1丁目1番3号

電話 03-3437-7082(ダイヤルイン)

FAX 03-3432-5507

ホームページ <http://www.jrc.or.jp>

発行所 株式会社日赤サービス

